

戦時下の中国東北と民衆 —国共内戦と抗米援朝の参軍運動を中心に—

Northeast China and the People in Wartime: Focusing on Enlistment Movement During Civil War and Korean War

隋 藝
SUI Yi

Abstract

This paper focuses on the real situation of wartime society and people. Through the investigation of the enlistment movement during Civil War and Korean War, outlines that actual situations of the resistance and obedience to the ideology of Chinese Communist Party (CCP) by the people in the Northeast. Discusses the composition of the Chinese People's Liberation Army and the Chinese People's Volunteer Army, and the conscription methods of the enlistment movement of CCP, to illustrate the continuity and discontinuity of Civil War and Korean War, to clarify the relationship between CCP and the people.

Key Words : Korean War, Enlistment movement, People, Resistance, Obedience

キーワード : 朝鮮戦争、参軍運動、民衆、抵抗、服従

1. はじめに

本稿は戦時下の社会と民衆の実態という大きな問題関心を出発点とする。国共内戦と朝鮮戦争の背景の下で、東北地域の特徴に基づき、参軍運動（中共は宣伝や動員によって、民衆を軍に入らせる、実質において徴兵と変わりはない）を手掛かりとして、東北民衆による中共のイデオロギーに対する抵抗と服従の実態を考察する。また、中国人民解放軍（以下「解放軍」と略す）・中国人民志願軍（以下「志願軍」と略す）の内実に迫りながら、軍の構成と徴兵の手段から国共内戦と抗米援朝運動（中国が朝鮮戦争の参戦にともない全国的に展開された大衆運動）の連続と断絶を解明し、党と民衆の相互関係を明らかにする。

まず、中国の東北という地方は、ロシアと朝鮮に隣接して、豊富な地下資源と農業資源を有しており、歴史上において争奪の対象となってきた。19世紀末から20世紀初頭にかけては、ロシアと日本を始め、外国勢力の進出にともない、鉄道網が整備されて、東北の近代化が加速された。1932年「満洲国」（以下「」を略す）の建国から、東北の工業、とくに重工業が推進され、

アジアにおける最も重要な工業地域となるまでに発展を遂げた。1945年8月15日満洲国の崩壊にともない、東北は政治の空白地となり、国民党と共産党が争奪する焦点となった。共産党はおよそ3年間をかけて、1948年に東北を占領した。それから1年足らずで1949年にほぼ中国全域を占領下に置いて、中華人民共和国を建国した。したがって、東北は国共内戦の帰趨を決定した地域と考えられる。それ以降、東北は全国の経済回復の先頭に立ち続けていた。1949年に東北は全国の工業品の34%を提供して、1952年には52%にまで上昇したという（麥克法夸爾、費1990：84-85）。こうした東北地域は全国における最も重要な工業基地である上に、朝鮮半島と隣接するため、朝鮮戦争に対する反応は最も敏感な地域といえる。東北は抗米援朝運動に関する人力と物質の供給が迫られるだけでなく、社会の緊張感が溢れ、国共内戦及び朝鮮戦争の戦時下における政権側の政策と民衆側の対応が最も端的に現れる地域と考えられる。

そして、戦時下の政党と民衆の関係を理解するために、最も有効な手がかりの一つとしては参軍運動が挙げられる。家族を離れ、戦争に向かう生死に関わる重大な問題に対して、人々はどのような思いで受け止めたのか。参軍運動を通して、人々の公権力に対する表と裏の対応を窺える。

中共の参軍運動に関する研究は、主に国共内戦期を中心に、土地革命と関連付けながら議論されている。門間理良は、党組織の構築が軌道に乗り出したため、減租減息によって農民に利益を与えたため、地主の復讐に抵抗したため、という三つの理由で農民が中共側と組み始めて、中共軍の拡大に貢献したと論じており、特に、中共の強力な組織化の機能を強調している（門間1997）。これに対して、角崎信也はさらに中共革命史観を相対化する視角を持っており、東北の徴兵における雇用、強制、捕虜獲得といった様々な手段が用いられたことを指摘し、中共の大衆運動の暴力性と収奪性を論じている（角崎2010）。しかし、角崎論文はやはり東北地域の特徴と東北内戦の複雑さに対する配慮が不十分で、東北軍隊の構成は他の地域と大きな違いがないという結論を導いた。また、両氏の研究は党と民衆の関係に関して、ともに静態的に捉えているため、とくに東北における国民党と共産党による一進一退の内戦の推移にともなう党と民衆の関係の変化が見えにくくなっている。

国共内戦期の参軍運動の研究蓄積と対照的に、抗米援朝運動期の参軍運動に関しては史料の制約があり、研究成果が手薄であって、その内実は未だ不明である。同じ戦時下であっても、朝鮮戦争は国共内戦期の中国人同士の間での戦いと異なり、対外戦争であった。このような戦争背景の下で、参軍運動においては民衆を比較的に動員しやすくなったのか、党と民衆との良好な関係は築かれたのか、未解決の問題が多くある。また、抗米援朝時期の徴兵は内戦時期よりさらに各地の格差が現れた。例えば、四川省などの西南地域の「土匪」出身の志願軍が多く存在していたと指摘されている（周2011）。また、華北は西南地域より、早く「解放」され、西南地域のような反共産党勢力をそのまま志願軍に投入する条件がなかったため、動員による徴兵が行われた（河野2016）。ところが、河北省において、中共は内戦時期の強制や傭兵といった徴兵方式を脱して、宣伝によって理想的な徴兵を目指したにも関わらず、中共の基層社会における影響力が低かったため、抗米援朝の参軍運動は内戦時期と比べて、大した改善がなかったと河野正は指摘している。

ただし、河野論文ではこれらの指摘に対して必ずしも十分な分析が行われていない面がある。例えば、中共の基層社会に対する影響力の評価の根拠が提示されていなかった点が惜まれる。

上記の地域と対照的に、東北は最も早く「解放」された行政大区であり、朝鮮と隣接するため、朝鮮戦争や抗米援朝運動の参軍運動に対応できるという指摘がある（河野 2016 : 2）。しかし、実際に、東北の民衆は東北から逃げるのが特に多く、朝鮮半島に近いからであるとも言及されている（Dikötter 2013 : 141-142）。

本稿では、以上の先行研究を踏まえて、国共内戦期の中共軍の拡大と抗米援朝運動期の参軍運動に対する分析を通じて、軍隊の内実に迫りながら、党と民衆の関係を明らかにし、国共内戦と抗米援朝運動の連続と断絶を解明する。また、中共側の公式史料だけでなく、内部史料の『内部参考』や口述資料、回顧録を用いて、多角的な視点より戦時下における東北民衆の参軍運動に対する抵抗と受容の実態を考察する。

II. 国共内戦期における中共軍の拡大

1. 国共内戦の推移

東北における国共内戦は一進一退の激しい争奪であり、戦局の情勢が中共革命の展開、および民衆の対応を大きく規定した。そこで東北における国共内戦の戦局の変遷を簡単にまとめる。

表1に示しているように、東北における国共内戦は主に三つの時期に分けられる。第I期は、中共軍が国民党軍より先に東北へ進出を果たした時期である。とくに、8月にソ連軍とともに東北へ進軍した元東北抗日聯軍は、東北の57の大、中都市に駐在して、都市の行政を接管した。そして9月に、元東北抗日聯軍は東北に到着した八路軍と新四軍と合流して、中共軍の東北における軍事的優勢を構築した。しかし、1945年11月、アメリカの援助の元で、国民党ははじめて東北へ進軍した。また、ソ連の国民党に対する姿勢が、非協力的なものから協力的なものへ転換したこともあり、東北における中共軍の優勢は次第に失われ、大都市を放棄することを余儀なくされた。11月20日、中共は「幹線を開け両側を占領する」へ東北政策を変更し、12月に「強固な東北根拠地を建設する」（「建立強固の東北根拠地」）の方針が定められた。その後、ソ連の東北からの撤退にともない、中共軍と国民党軍の戦いも本格化し、国民党の攻勢期となっていった。これが第II期である。中共軍の劣勢は1947年4月まで続き、このおよそ1年半にわたって、中共軍の兵力が大幅に増加することはなかった。ところが、三下江南四保臨江戦役が中共軍にとっての転機となり、第III期を迎えた。中共軍は1947年5月から連続的な攻勢によって、1948年11月に国民党軍を破り、東北全土を占領したのである。この期間に、中共軍は兵力を130万人までに激増させた。

表1 東北の内戦における主要戦役と中共戦力の変遷

主要戦役	時期	兵力(人)	捕虜(人)	備考
	1945.10	11万		I期、3ヶ月
	1945.12	27万		約16万人の拡張
秀水河子戦闘(1946.2)				II期、16ヶ月 内8万人の元冀察熱 遼軍区部隊を除き、 約11万人の拡張
	1946.3	31万		
四平戦役(1946.4~1946.5)				
鞍海戦役(1946.5)			2104	
新開嶺戦役(1946.10)			5800	
	1946.11	36万		
三下江南四保臨江戦役 (1946.12~1947.4)				III期、18ヶ月 約86万人の拡張、 内1948年春までに 二線兵団から37万人、 残り49万人の拡張
	1947.4	46万		
夏攻勢(1947.5~1947.7)			6万	
	1947.7	51万		
秋攻勢(1947.9~1947.11)			4万9900	
	1947.11	73万		
冬攻勢(1947.11~1948.3)			10万5000 8320(蜂起)	
	1948.4	98万		
遼瀋戦役(1948.9~1948.11)			30万6200 2万6000(蜂起) 8万3000(投降)	
	1948.11	132万		

出所：『第四野戦軍』（戴常楽・劉聯華主編、国防大学出版社、1996年、1-10頁、229-231頁）、および『遼瀋決戦下』（中共中央党史資料征集委員会、1988年、684頁）、に基づいて筆者作成。

1945年当初東北へ進軍した中共軍は10万余りの兵力であったが、1948年東北「解放」当時、「100万精兵」（「百万雄獅」）と称するまで拡張した。中共軍が爆発的に増加することができた要因と大量の新兵の構成について、東北の戦局の変遷と照らし合わせながら、拡兵（兵数の拡大）の特徴によって、第I期の1945年8月から1945年12月まで、第II期の1946年1月から1947年4月まで、第III期の1947年5月から1948年11月まで、三つの時期に分け（表1）、以下で検討する。

2. 第I期、短時間における迅速な拡大

中共の命令によって、東北へ最初に進軍を果たしたのは、1945年8月末、李運昌が率いた1万5000人ほどの「東進工作委員会」であった¹。11月に李運昌の部隊は8万人までに拡大したという²。中共による根拠地建設や大衆運動が未だ展開されていない時期において、李運昌の部隊

1 『中共中央文件選集』第15冊、中央档案馆編、1991年、219頁。

2 1945年11月4日「關於增調兵力控制東北的指示」（前掲『中共中央文件選集』第15冊、401-402頁）。李運昌の回顧によれば、11月まで、約10万人まで拡大したという（李運昌「冀察遼部隊挺進東北配合蘇軍作戰回憶」『遼寧解放紀実』遼寧省政協文史資料委員会編、1988年、27頁）。

だけではなく、中共軍の拡大は敵軍の改編が主要な手段であったと考えられる。

まず、山東局から東北へ軍隊を派遣する際に、中共中央は「目前国民党およびその軍隊がまだ東北へ到達していない時期（短時間内に到着できないと推測できる）を利用して」、「偽軍を改編し、地方武装を組織する」³と要求した。つまり、中共中央は国民党が東北へ進軍するまでの時期を利用して、東北における地位を固めようとした。そのために、中共は偽軍の改編を積極的に意識して、迅速に力を発展する意思が明白であった。この時期における中共の軍を拡張する意図と手段について、同じ9月の中央による全軍に対する指示から読み取れる。

戦争〔日中戦争—引用者〕が終わったが、敵偽の武装はまだ解除していない。敵偽の力を肅清し、内戦の危機を阻止して、戦後に平和民主を真に実現するように保障するために、我が八路軍と新四軍の補充拡大が差し迫った。日本軍が投降を宣言してから、我が軍は百以上の都市を解放して、〔解放区には—引用者〕2000余万人口を増加し、銃10万余丁を手に入れた。そして、中央はとくに10、11、12の3ヶ月以内に、八路軍と新四軍は十数万人を補充し拡大するように努力すべきと決定した。各区はいくら拡張するかを各区で決めたのち中央へ報告する。新兵の出所は、主に民兵の動員に依拠するが、新解放区内においては、個別的に拡大し、および偽軍と捕虜を我が軍の味方に入れる。目前、軍隊の組織の整備と拡張は各根拠地の最も重要な任務である⁴。

中共は国民党との戦いを備えるために、全軍に対して、軍備拡張の命令を出した。当該時期において、軍隊の拡張は極めて重視され、各解放区の最も重要な任務と位置付けられた。また、戦後僅か1ヶ月ほどで日本軍や偽軍から大量の武器を獲得したことも分かる。そして、中共は偽軍に依拠して、迅速に軍備の拡張が実現できると認識して、新解放区の軍隊の拡張について、偽軍と捕虜に対する政策を重要視していた。中共にとって、最も肝心な新解放区であった東北における、偽軍改編の詳細な資料を示すことは困難であるが、その実態については、当時の党の幹部の回顧から垣間見ることができる。

最初に東北へ進軍した「東進工作委員会」の東路隊の司令官曾克林は「興隆県を奪い返す際に、熱河西南地区の防衛司令官黄方鋼の偽満軍四つの連隊、七つの討伐大隊の1万人あまりが決起(原文「起義」)した」、「中路隊は8月下旬、平泉で偽満軍の一つの旅団の武装を解除して」、「敵偽5000人を捕虜とし、青龍県偽討伐隊2000人は我が軍に投降した」と回想した⁵。上述の中共中央の9月に出された偽軍の改編に関する指示に従い、東北において偽軍に対する改編が急速に展開された。さらに、10月に中共中央は、敵偽・捕虜に対して「一切の体力が強い兵士を、全部味

3 1945年9月11日「中央關於調四個師去東北開闢工作給山東分局的指示」(前掲『中共中央文件選集』第15冊、274-275頁)。

4 1945年9月21日「中央書記處關於擴兵与編組野戰軍的指示」(前掲『中共中央文件選集』第15冊、288-289頁)。

5 曾克林「先機挺進東北的冀熱遼部隊」(前掲『遼寧解放紀実』34-35頁)。李運昌の回顧では同じことが見られる(前掲『遼寧解放紀実』27頁)。

方に入れて、我が部隊を補充すべき」⁶と何度も強調した。下記の史料には具体的な偽軍に対する処置が示されている。

瀋陽に到達して、間もなく〔1945年11月前後—引用者〕高尚斌の偽匪の非正規軍（原文「偽匪雜牌軍」）2、3000人を收容して、保安二旅団に改編した。高尚斌は東北軍の元部下であり、旅団長として任命された。私は部隊を掌握するために李英武を派遣した。李は20余名の幹部を率い、〔二旅団の一引用者〕政治工作を行ったが、わが軍は瀋陽から撤退した際に、二旅団から4、500人しか連れてこなかった⁷。

これらの幹部の回顧から当該時期の中共は偽軍といった武装力に対して、改編だけでなく、そのリーダーの任命も行ったことが分かる。つまり、一つの大隊に相当する人数の人を連れて投降すれば、そのリーダーはそのまま大隊長として任命される。一つの連隊に相当する人数であれば、そのリーダーはそのまま連隊長とされる。例えば、上記の黄方鋼や高尚斌は旅団長に任命された。こうした任命の方法によって、中共軍は迅速に拡大できたと考えられる。しかし、後述するが、こうした改編・任命の仕方は中共に大きな被害をもたらした。

中共軍による偽軍と捕虜の改編は国民党側の資料からも確認できる。1945年12月、陳誠が提出した蒋介石への中共軍情報によると、中共「遼吉二省においては、中央軍の名義を借りて、偽滿警察憲兵、失業労働者、匪賊ごろつき（原文「土匪流氓」）、失業分子」といった者「合計15万人を募集したり、強制連行したりした」と報告した⁸。さらに、齊世英は「〔国民党一引用者〕中央の東北における最大の致命傷は偽滿軍隊の收容ができなかったことにほかならない、そのため彼ら〔偽軍一引用者〕は余儀なく各自の道を選択した。そして、中共は強大化することができた」と回顧した⁹。国民党側の幹部も中共軍が東北において急速に拡大できた要因は、偽軍に対する收容の成功であったと認識していた。

また、これまで見てきた資料の中で、特に中共側の資料において、鉱山労働者を軍隊に取り入れた記述も見られる¹⁰。偽軍に対する收容・改編は中共軍の拡張の要因であることを確かめた上で、ここではさらに東北地域の特徴としての工場・鉱山労働者と中共軍の拡張との関係を考察したい。

6 「一切精壮士兵、均加争取、補充我之部隊」1945年10月16日「中央關於处理国民党軍隊被俘虜人員的指示」（前掲『中共中央文件選集』第15冊353-354頁）。同じような指示は「俘虜兵除老弱病殘廢優資分途遣送回部回籍外、精壮士兵应尽量争取分補各部、中下級青年軍官、亦应争取改造為我服務」1945年10月13日「軍委總政治部關於俘虜政策及瓦解敵軍等給劉伯承、鄧小平的指示」（同前339-340頁）；1945年10月9日「中央關於争取敵偽軍向我投降的指示」（同前320-321頁）。

7 呂正操「挺進東北」（前掲『遼寧解放紀実』4頁）。

8 1945年12月「陳誠戴笠呈蔣委員長有關共軍与蘇軍之情報」（『中華民國重要史料初編—対日抗戰時期、第七編 戦後中国（一）』中国国民党中央委員会編印、1981年、567-568頁）。

9 「中央在東北最大的致命傷莫過於不能收容偽滿軍隊、迫使他們各奔前途、中共因此坐大」（『齊世英先生訪問紀錄』中央研究院近代研究所、1991年、269-270頁）。

10 「挺進東北」（前掲『遼寧解放紀実』4頁）、「先機挺進東北的冀熱遼部隊」（前掲『遼寧解放紀実』45頁）、など。

日中戦争後、鉱山労働者は中共に協力する典型的事例として、撫順炭坑で強制労働の400余人の「特殊工人」が自ら武装して、鉱山を守り、その後、中共に改編され、部隊に取り入れられた例が挙げられる¹¹。この事例から見れば、中共軍に協力する者は主に「特殊工人」であった。「特殊工人」は一般の華北からの出稼ぎ労働者とは異なり、満洲国時代に少数の華北、内モンゴルから連行した八路軍、国民党軍の戦争捕虜と清郷工作で逮捕した一般中国人に限られていた（張 1984 : 343）。これらの「特殊工人」は満洲国統治者にとって、非協力的な一部分の労働者とも言われる（松本 1988 : 144）。1942年3月時点満洲国工業に投入された「特殊工人」は合計1万5411人であった（解 2002 : 102）。また、重労働や虐待による逃亡と死亡が跡を絶たず、日本敗戦前夜「特殊工人」の大多数は逃亡したと言われる（張 1984 : 384 ; 松本 1988 : 144）。つまり、東北の中共軍の拡張において、鉱山労働者は一定程度の役割を果たしたが、その人数は限られていたと考えられる。

以上により、戦後1945年末まで、中共軍による急速で大規模な拡張は偽軍に頼ったことがわかる。こうした拡張ができた要因は、中共の主観的な意図と客観的な勢力の強弱によるものと言える。まず、中共による偽軍に対する改編は、決してやむをえないことではなく、国民党が到着するまでに自らの勢力を固めるために、積極的に偽軍を収容して改編する姿勢が窺える。しかも、呂正操によれば、政治工作と思想教育を通じて、これらの兵士を掌握できると見込んでいたようである。そして、1945年末まで、国民党軍は未だ東北には手がとどかず、ソ連軍と協力して進攻する勢いを得たことは中共による偽軍の改編に客観的な条件を提供した。国民党軍が未到着のため、中共軍に抵抗できない偽軍は武装力として、中共に組する以外の選択肢がない中で、余儀なく中共に改編された。また、相当の人数を連れて中共軍に投降すれば、連隊長や旅団長にまで任命されるため、権力を目当てに、中共軍に従った人々も少なくなかったと考えられる。

3. 第Ⅱ期、中共軍が受けた被害と拡張の低迷

第Ⅱ期の1946年1月から1947年4月までは、東北において中共軍は優勢を失い、国民党軍の攻勢期と言える時期であった。中共は瀋陽や長春といった大都市と鉄道の主要線路を放棄することを余儀なくされた。進攻の勢いから後退へ転じた中共軍にとっては、第Ⅰ期のように容易に偽軍やもともとある地方武装勢力を改編することができなくなった。また、すでに改編された偽軍や地方武装勢力は相次いで軍力が優勢であった国民党に寝返ったため、中共軍は大きな被害を負うこととなった。その具体的な様子と深刻さは以下の史料から窺える。

我々は収容、改編と任命の方法によって、一部の武装勢力を拡大した。偽満の役人に対しても任命をし、抗聯の裏切り者さえ任命した。これらの部隊は後に寝返って、我々を攻撃して、我々の幹部を殺した。〔中略〕南満、東満には詳細な統計がなかった。知っている限り、一昨年〔1945年—引用者〕12月、一つの旅団が撫順で寝返った。東満の周保中の部隊は7000人が寝返った。当初、李運昌の部隊は4万人と言われたが、錦州から撤退した後、大部分が寝返

11 「煤城春天」(前掲『遼寧解放紀実』250-251頁)。

り、熱河に到着した際に5000人もいなかった。〔中略〕〔1946年—引用者〕5月末、四平戦役後、我が主力が後退してから、奉吉線と瀋陽、長春の西側における地方武装勢力はあちこちで寝返って、総崩れとなった。大衆は我が方の落後した主力兵士の銃を奪ったりして、北満双城で騎兵連隊の寝返りが発生した¹²。

上記の史料によれば、中共軍の第Ⅰ期の拡張において、偽軍といった旧武装勢力のリーダーに対する任命が第Ⅱ期の中共軍の深刻な被害へと直接につながったと考えられる。当初、拡兵の典型な事例として宣伝された李運昌部隊は、4万人から5000人へ減員された。北満だけで反逆者は3万人以上であって、100人以上の幹部が殺害されたという報告もあり¹³、当時幹部不足の中共にとって大きなダメージであった。

さらに、1946年4月から5月までの四平戦役において、中共によって改編や組織された武装勢力の寝返りと逃走がより一層際立った。反逆者は中共軍の軍隊に取り込まれた新兵だけでなく、初期に組織された地方武装勢力までもが寝返って、撤退途中の中共軍に襲撃したことが窺える。こうした反逆の実態からこれらの地方武装勢力の内実は複雑であって、中共にとって容易に掌握できない組織であったと推測できる。しかし、第Ⅱ期の中共軍の拡張において、初期の地方武装勢力は掌握しきれないにも関わらず、やはり重要な新兵の供給源として位置付けられた。

1946年4月、彭真は「兵士の供給源を保障するために、臨時の動員に頼るだけでは間に合わない」と明言し、「独立連隊、大隊を編成する」、すなわち地方武装を組織することの重要性を提起した¹⁴。要するに、戦争での劣勢が続く中で、偽軍という兵力の供給源を失った中共は、地方で武装勢力を組織する手段に着手したと考えることができる。地方での武装勢力は「民兵」「自衛団」「独立連隊」といった形を持ち、中共は「民兵→地方部隊→主力部隊」というルートで主力を補充しようとした（門間 1997）。しかし、表1からみれば、こうした拡兵の手段はこの段階においては大した効果が挙げられなかったようである。結局16ヶ月間に11万人を新たに軍隊に取り入れたが、第Ⅲ期において拡張した人数と比べることができないほど少なく、第Ⅰ期の2ヶ月間で拡張した新兵人数にも及ばなかった。中共は地方武装勢力をうまく組織できず、組織しても掌握しきれなかったことが窺える。これと対応して、民衆側は中共による地方武装勢力への組織動員に対して積極的に支持したとは考えられない。一部分の民衆は「八路軍は勝利できるが、少しずつ粘らないと。関内と一緒だ、現在八路軍に付いてはいけない、勝利が近づくとやってあげる〔八路軍と協力するあるいは八路軍に参加するなど—引用者〕」¹⁵と考えた。すなわち、中共

12 1947年4月10日「東北剿匪工作報告」（『中共西滿分局資料彙編（内部資料）』中共齊齊哈爾市委党史工作委員會編、1985年、161-169頁）。

13 「東北剿匪工作報告」（前掲『中共西滿分局資料彙編（内部資料）』162-163頁）。

14 1946年4月19日彭真「切不要忽略根拠地的建設」（『遼瀋決戦 上』中共中央党史資料征集委員会、1988年、41頁）。

15 「基本群衆相信我們會勝利、但不相信我們能在法庫站住、怕我們走、有一種等待心理『八路軍會勝利、但是慢慢磨、和関内一樣、現在幹不得、等將來快勝利時再幹』（「敵人蚕食法庫和我們的對敵鬥爭（1946年12月前情況）」『解放戰爭中的遼吉根拠地』中共遼寧省委党史研究室編、中共黨校出版社、1990年、182頁）。

軍が戦争において劣勢に立つ限り、民衆は保身といった合理的打算に基づいて、中共に容易に協力しないのが現実であった。

4. 第Ⅲ期、「100万精兵」まで拡大

第Ⅲ期の1947年5月から、戦争において中共軍は優勢へ逆転して、国民党を破り、1948年11月に東北全土を治めた。戦争の情勢の好転にともない、中共軍は爆発的に兵力を拡大できた。第Ⅲ期の18ヶ月間において、中共軍による拡大した兵士は86万人であった(表1)。まさしく羅榮桓の言葉にあるように「りっぱな戦いができれば、兵力の供給源は問題にならない」¹⁶という事態であった。

大規模な戦争の条件を満たすために、中共は地方武装勢力の組織にさらに力を入れた。1947年7月下旬に、東北局は「二線兵団の設立に関する決定」(「關於成立二線兵団の決定」)を出した。野戦軍或いは地方武装勢力から少数幹部や古参兵を引き抜いて中堅として、大量の新兵によって独立団を編成して、二線兵団とした。こうした二線兵団は短期間な訓練をへて、直ちに中共軍の主力を補充することができると言われていた(丁、戈、王 1987: 132-133)。さらに、1947年12月「東北局の1948年の任務に関する決定」(「東北局關於1948年任務的決定」)で、「解放軍の主力を更に拡大するように動員して、さらに一倍を増加し、かつ十分な訓練を経験した予備を保障して、兵力を補充する。1948年4月末に完成すべし」¹⁷と指示した。そして、1948年春までに176の二線兵団が組織され、37万人の新兵が供給されたと言われていた(戴、劉 1996: 8)。

上記のように地方武装勢力を組織できたことの前提としては、中共軍の連続的勝利によって、占領地が拡大し基本人口が増加したことがあった。また、当初弱小な中共に対して、消極的或いは抵抗的であった(金銭の利益、身の安全、権力といったことを重視する)民衆は、また同じ理由で強大化してきた中共を支持するようになったと考えられる。ゆえに、第Ⅲ期における地方武装勢力の組織化やこれらの武装勢力を利用して、主力に兵力を補充することが比較的順調に展開したことは、中共の軍事的優勢が根本的な要因であったとはいえるが、必ずしも中共の組織力¹⁸が向上して、民衆の自覚が高くなったからであるとは限らない。

改めて表1を見れば、中共軍は1948年4月の98万人が1947年11月の73万人より25万人増であった。ただ、この25万人は全員地方武装から供給したとは限らないし、当該時期、地方からの新兵は25万人以下と考えたほうが妥当であろう。1948年春までに、東北局の兵力を1947年より一倍増加する、つまり二倍にするという任務は達成できなかった。なぜならば、下記のように地方における徴兵はすでに農業生産、後方支援と矛盾が生じていたからである。

16 「只要仗打得好、兵源是不成問題的」(1948年3月4日羅榮桓「在東北野戦軍政工會議上的報告」前掲『遼瀋決戦上』34頁)。

17 「動員拡大解放軍主力、再増加一倍、並保証有足夠与經過訓練の後備補充兵力、1948年4月底完成」(前掲『解放戦争中的遼吉根拠地』45頁)。

18 門間(1997)による中共の新兵動員工作は「組織作り」そのものであったという重要な論点については、断言できないと考える。

現在解放区の大衆の負担はすでに非常に重いのである。これは矛盾である。北満には1400万の人口があり、統計によればすでに兵力30万、労働力（原文「民夫」）10万が出された。ある地方においてはすでに総人口の6%～8%を占めていた。北満の人口の三分の一は都市人口で、約400万人である。土地闘争の中で20%弱の人口に打撃を与え、約250万、そして、農業生産ができるのはただ750万人が残され、しかも年をとって体力が弱い者も含めている。さらに、北満において、生産にたずさわらない軍政人員は30万いる。従って、700余万人は400万の都市人口の食糧と30万人の衣食を供給する。大衆の負担は決して軽くはない。去年徴収した公糧はすでに大衆の総収入の50%を占めた。去年〔1947年—引用者〕農民は土地、動産を分配されたため、負担が重いとは感じていなかった。今年農業生産は大きな困難が発生しかねない¹⁹。

上記によれば、北満を事例として、大規模な徴兵による農村人口の減少は、農業生産に影響を与え、拡大しつつある占領地域、とくに都市、および軍隊を養うことができなくなった。1947年農民は土地や財産が分配されたため、食糧徴収は農民の総収入の半分を占めても、不満を引き起こすまでには至らなかった。だが、分配できる土地がなくなり次第に、農民から食糧の徴収が困難になることも予想された。当該時期の党と民衆の関係において、金銭、土地に関わる経済利益は大きな役割を果たしていたことが窺える。さらに、1948年に前線と後方の矛盾が各地で現れ、中共はついに各軍区へ指示を出して、地方での拡兵に制限をかけた。

今年華北、華東、東北、西北の各区において、個別の地方は原案の拡兵の計画を実行することを許可する以外に、その他すべて拡兵すべきではない。農村の人口が大きく減少した。〔中略〕各区の拡兵（東北を含め）はすでに飽和点に達した。〔中略〕今後、都市を攻める際に、野戦の際に獲得する捕虜は大いに増加できる。各区および軍は力を入れて、捕虜の訓練工作を組織して、原則的に一人も釈放せず、大部分を我が軍に補充して、一部を後方の生産に参加させる。一人も無駄にならない。我が軍が蒋介石に勝つための人的資源は主に捕虜に依拠する。この点について全党において注意すべき²⁰。

地方での拡兵が制限された背景には農村人口の減少の中で、戦争による十分な捕虜が獲得できることを大前提としていたからであったと考えられる。中共中央の捕虜に対する政策は原則的に一人も釈放せず、全員を軍隊に補充するものであった。それに、表1を合わせて見れば、第Ⅲ期における合計86万人の兵力の増加から、1948年春までに供給された37万人の地方武装勢力を除いても、なお49万人の兵力が増えていた。同時期の捕虜数は48万余人であった。第Ⅲ期においては、地方武装勢力からの兵力の供給が限られており、中共軍の拡張はほとんどを捕虜に依

19 1948年3月4日羅榮桓「在東北野戦軍政工會議上の報告」（前掲『遼瀋決戦 上』34頁）。

20 1948年7月17日「中央關於兵源補充問題的指示」（『中共中央文件選集』第17冊、中央檔案館編、1992年、249-251頁）。

ていたと考えられる。換言すれば、中共は新たに民衆を対象とする徴兵を行わなくともよく、民衆の徴兵に対する支持と協力は必要で不可欠なことではなくなった。

III. 朝鮮戦争期における志願軍の供給

1. 抗米援朝運動における東北

1948年11月、中共が勝利して、東北を占領した。東北は長年の戦争を終え、経済回復を中心とする比較的穏健な社会統制が中共に行われた（隋 2015）。しかし、1950年朝鮮戦争の勃発にともない、東北社会は再び戦時秩序へ転換し始めた。

抗米援朝は中共政権が樹立してから、最初の対外戦争であった。そのため、民衆の民族主義やナショナリズムの高揚を引き起こし、中共の社会統制を強めるには有利な条件を提供した。例えば、最も民衆の意識が現れる参軍運動において、中共の公式報道によれば、「両親が息子を、妻が夫を戦場へ送り出し、兄弟が我勝ちに軍隊に入りたがる」（父母送兒子、妻子送丈夫、兄弟争相入伍）という人を感動させる事績が数えきれないほどあった²¹。ところが、前述したように、1948年に中共は東北を占領した当時、前線支援と後方の可能性の間に大きな矛盾が生じ、一般民衆からの新たな徴兵は限界に達した。そこで、1950年東北における一般民衆からの新たな徴兵の可能性に疑問を抱え、実際の東北における徴兵を検討する必要がある。

朝鮮戦争が勃発してから、中共によるはじめての軍事対応は、1950年7月に正式に策定された「東北辺境の防衛に関する決定」（「關於防衛東北辺防決定」）であった²²。その主な内容としては、まず、部隊の移動を手配することであった。具体的には、元中原地区に配置している国防機動部隊第13兵団とチチハルの第42軍団、砲兵第一、第二、第八師団、および工兵など、計25.5万人によって、東北辺防軍を組織する。そして、後方支援の準備に取り掛かることであった。具体的には、東北から荷馬車4000台を動員して運輸に当たる。31万人、役畜3万頭、車1000台、3ヵ月分の糧秣を用意する。さらに、兵力補充を準備することであった。具体的には、兵力補充のために、中南軍区は10万人の復員を減少する²³。それ以上に補充を必要とする場合は、東北において生産に参加している地方師団を以て、補充するなどの方法を取らせる。

そして、10月から参戦する際に、最初に朝鮮戦場へ送り込まれた志願軍は上記の東北辺防軍であった。この東北辺防軍は、すなわち元第四野戦軍と華北野戦軍の一部であり、その後には派遣された志願軍も中共の野戦軍が主力となった²⁴。当該時期、朝鮮戦争に対応するための兵力の調

21 「旅大地区青年紛紛要求赴朝抗米」『東北日報』1950年11月22日、「組救護隊赴朝鮮前線服務、母送子妻送夫参加志願軍」『東北日報』1950年12月29日、「貝大娘—模範軍属訪問記」『東北日報』1951年2月7日、「兩兒子双双参加志願軍、老夫婦同時当选泉劳模」『東北日報』1951年2月3日、など。こうした記事・報道が『人民日報』、『抗米援朝専刊』、および1950年10月以降の『東北日報』に見られる。

22 『中華人民共和国史編年1950年卷』当代中国研究所編、当代中国出版社、2006年、509頁。

23 朝鮮戦争以前、中共は復員工作が始めていたが、朝鮮戦争に対応するために、復員工作が中止され、復員された元兵士を再度徴兵された（河野 2016 : 2-3）。

24 『朝鮮戦争 第一卷 中共軍参戦及聯合軍重新反攻』南朝鮮国防戦史編纂委員会編（固城、齊豊、龔黎訳編）1988年、121-122頁。

整は元ある部隊内にとどまっていたことが分かる。その一方で、東北は抗米援朝運動において、重要な銃後の位置づけが見て取れる。つまり、当該時期においては、東北だけではなく、全国範囲において未だ民衆に対する大規模な参軍動員は行われていなかった。抗米援朝の参軍運動は12月から大規模に行われたのである。聶榮臻は毛沢東への報告書の中で、朝鮮戦争の長期化を予想し、1950年冬で35万人を動員させることを提案した。そのノルマの分配は「西南地区10万、華東地区14万、華北地区5万、西北地区2万、中南地区4万」とあり、東北は徴兵任務を与えられなかった²⁵。しかも、1950年8月の東北辺防軍の補給問題に関する中央と東北局の会議において、以下のように東北の位置づけが決定された。

糧食、まぐさ、石炭は東北によって供給される。経常費用は総後方部が本来辺防軍の所属した第四野戦軍から調達して東北局へ供給する。予算外の一切の戦争のための費用は中央が支出するが、東北が立て替える²⁶。

東北の抗米援朝運動における後方支援の位置づけはますます明確化した。1951年高崗は抗米援朝のための東北区の計画を中央に報告した。各部門の3月末までに完成すべき任務は要約すると以下のとおりである。まず、各軍種と兵種、および新兵の訓練を行うことであった。そして、4月末までに5つの新しい空港を建設し、さらに物資の準備と前線への運輸を行い、そのため新たに運輸連隊2つ、運輸大隊8つ、担架連隊15、および荷馬車や手押し車を大量に製造することであった²⁷。

以上のいくつかの史料を合わせて見ると、東北は抗米援朝運動において、徴兵より軍隊の訓練、物資の供給、担架隊および荷馬車といった後方支援を主要な任務内容としたようである。

2. 志願軍の供給

東北において抗米援朝の兵力の供給が主要任務となっていない理由はもちろん、後方支援のための労働力の確保があったと考えられる。その一方で、前線の立場から見れば、新兵より戦争経験のある古参兵が望まれていた。前線の彭徳懐らは「関内の国防軍公安部隊から、大量の戦争経験のある古参兵を動員して、志願軍の前線部隊を補充して、戦力を保つことを提案した」。これに対して、「中央軍委は全国軍隊に、中隊ごと古参兵を20人調達して、1951年2月までに第一回目の4万人余りの志願軍を集結する、1951年3月、共に12万名兵士を動員し、その中4万余りの戦争経験のある古参兵を含め、32の訓練連隊、8の独立連隊を編成して、志願軍前線部隊を補充するように命令した」²⁸。すでに検討した国共内戦期における徴兵と酷似しており、民衆ではなく、戦争経験のある元兵士が大量に動員されて、志願軍になったとみられる。その大量の

25 前掲『中華人民共和国史編年1950年巻』919頁。実際に1950年12月4日「關於動員35万新兵的指示」が出されたが、戦局の変化に従って9日にノルマは50万人に引き上げた。

26 前掲『中華人民共和国史編年1950年巻』614頁。

27 『中華人民共和国史編年1951年巻』当代中国研究所編、当代中国出版社、2007年、32頁。

28 前掲『中華人民共和国史編年1951年巻』12頁。

元兵士の内実は、国共内戦期における中共軍の拡大と関連付ければ、数多くの元国民党軍が存在していたことが明確であった。そして、朝鮮戦争へ派遣された志願軍の大部分は国共内戦で投降した兵士であり、毛沢東は彼らを信任せず、朝鮮戦争で消滅させる意図であったという極端な指摘もなされている（Dikötter 2013 : 135）。

さらに、重要な兵力の供給源は中国の西南部にあった。アメリカに所蔵している志願軍捕虜の審問記録に基づけば、四川や貴州出身の志願軍は多かったと言われている（周、畢 2011）。1950年、四川や貴州などの西南地区はまだ完全に中共に占領されておらず、中共による「剿匪」の最中であった。抗米援朝運動とこれらの地域の「解放戦争」または「剿匪」は重なっていた。そして、国共内戦期における中共の拡兵と類似する仕組みで、これらの「匪賊」（地方の反共産党勢力）は志願軍の重要な兵力の供給源となっていた。要するに、国共内戦期に投降した元国民党軍と西南地域で捕えられた「匪賊」を以て志願軍が充実されたと言える。また、これを原因として、以下のような志願軍の兵力の減員が考えられる。

志願軍総減員は9.1万人。その中に西線にいる六つの軍は三つの戦役を経て、死傷したのは3万人、凍傷および病気、逃亡したのは2.2万人；東線にいる三つの軍は、死傷1.9万人、凍傷および病気、逃亡したのは2.2万人。現在運輸が困難であり、食糧と弾薬、綿服、被服を入れることができず、体力が弱くなり、人員は非常に充実していない²⁹。

上記の史料は彭徳懐が1951年1月志願軍の現状と敵の動きを分析したものである。前述した元国民党軍や「匪賊」捕虜を強制的に朝鮮戦場へ送り出したため、大量の逃亡者を生み出したことや、南方出身の兵士は北方の気候に適応せず病気で戦闘力を失ったことが考えられる。

3. 参軍運動における民衆

東北の民衆はどのように参軍運動を記憶したのかを検討するため、まず、王D Yからの聞き取りを紹介する。王D Yは1929年遼寧省大窪県生まれ、鞍山市内在住、鞍山鋼鉄廠から定年退職した。

私は志願軍にいなかったのは、母に許さなかったからだ。多くの人は行きたくなかった。そこで、村の若者を会議に参加するように騙して、集めて、オンドルで寝かせた。一方で、オンドルを熱くまで炊き続けた。我慢できなくなり、尻を上げる人は、参軍したい人だと言われ、志願軍に送り出された。他の村では、娘たちを集めて、集会の時、若者に花を飾った。これを「愛軍」という。花を飾られた人が、志願軍になった³⁰。

29 前掲『中華人民共和国史編年1951年巻』26頁

30 2013年6月に実施した聞き取り調査である。

上記の口述資料によれば、民衆にとって、参軍運動は宣伝された「両親が息子を、妻が夫を戦場へ送り出し、兄弟が我勝ちに軍隊に入りたがる」とは全く異なる様子であった。このような物語は中共の宣伝の手段の一つであった。その一方で、口述資料における「参軍とオンドル」の物語について、ほとんどの話者が記憶している。

次に、隋Y Jからの聞き取り調査を示す。隋Y Jは1931年遼寧省大窪県生まれ、文化大革命以前営口市造船廠で働いていたが、「解放」初期、階級区分の際に、父親が富農と決められ、文化大革命中、迫害に遭った。

抗米援朝の時、人々を参軍するように動員した。私は児童団の団員であった。若者を集めて、オンドルに寝かせた。私が呼び出されて、火を起こして、オンドルを温める仕事を与えられた。「湯を沸かした」とその幹部に報告したが、「止めないで、炊き続けなさい」と言われた。年齢に達した若者は参軍に行かないといけないよ³¹。

上記の隋Y Jは「参軍とオンドル」の経験者であり、オンドルを炊く役であった。ところが、「参軍とオンドル」について、元中共の宣伝幹部であった姜C Xは以下のように語った。姜C Xは1937年営口市生まれ、営口市老辺区宣伝部副部長を歴任して、定年退職したが、2014年2月現在において党校の講師を兼任している。

〔抗米援朝の参軍について—引用者〕若者をオンドルの上に集めて、オンドルを熱くまで炊いて、我慢できなければ、参軍させられるという言い方があるが、私はそれが事実ではないと思うが、仮にあっても、個別的な現象であった³²。

中共の宣伝幹部を経験した姜C Xは、「参軍とオンドル」の物語を知っているが、事実ではないと否定し、また仮にあったとしても普遍的でなく、極めて例外的な一部分の事と考えていたようである。なお「参軍とオンドル」という事実について、『内部参考』には東北遼東省の拡兵問題に関して以下のような報告が見られた。

個別の村と一部分の村の中では、程度こそ異なるが、脅迫と命令の現象が発生した。例えば「擠兵」（殴ったり、凍えたり、熱いオンドルに当てたりするなどの手段）、「買兵」（参軍する人に債務を消したり、家屋を買ってあげたり、土地を交換したりするなど）、「騙兵」（参軍は鉾山を見張るだけで、県から出ないなど）。そのため、個別地区では参軍を逃れるために、手足の指を切断したり、足を壊したりすること、ひいては人を死に追いやった事件も発生した³³。

31 2014年2月に実施した聞き取り調査である。

32 2014年2月に実施した聞き取り調査である。

33 「東北各省最近時期的工作情報」『内部参考』1951年3月5日。

この史料により、東北の参軍運動において、「擠兵」「買兵」「騙兵」といった多様な強制命令や傭兵の現象が存在していたことが窺える。その中で、「参軍とオンドル」という手段もあったが、中共の報告書の中では個別的現象と記しているし、実際の聞き取り調査の中で、自ら経験したり、見たりした人も少なかったため、当該時期の「参軍とオンドル」の事情がどれほど広がっていたのかを知ることは難しい。しかし、実際に見たこともなく、経験したこともないのに、なぜ周知のことになり、その背景にはいかなる民衆の意識が潜んでいたのかに興味深い。「参軍とオンドル」の物語は多くの人々が経験していたか否かにもかかわらず、広く知られていることは、中共の参軍運動に抵抗するために民衆の間で伝播したからではないだろうか。このように事実よりも話の伝播として現れているという現象こそが、多くの民衆は自ら参軍したくないという意思の現れであり、中共のイデオロギーに抵抗する表象であったと考えられる。その中で、姜C Xは元地方宣伝幹部であり、中共のイデオロギーに対する受容がより強かったため、「参軍とオンドル」の物語をデマと見なしていると解釈できるだろう。

4. 記憶の中で志願軍になる人々

既述したように、東北においては、抗米援朝運動のための徴兵任務は比較的重くなかった。また、宣伝に対して民衆は積極的とは言えず、むしろ消極的に抵抗していたように見える。だとしたら東北においては、どのような人々がどのような経緯をへて志願軍になったのか。隋Y Jは兄に関する記憶を語った。

お兄さんの隋Y Xは、日本人〔満洲国—引用者〕の時、あちこちに隠れたが、結局見つかって、ダム工事に連れて行かれた。その後、国民党軍に入り、雑用として働いた。〔東北—引用者〕解放後、中共に工作されて、「国民党の時に兵隊だったのに、我々が来たら兵隊に入らないの」と言われた。もう参軍しかなかった。1951年朝鮮で死んだ。1950年、家の南に住んでいた朝鮮人が通訳として強制的に戦場に送り出されたこともある³⁴。

隋Y Jと似ている記憶は屈L Zも持っている。屈L Zは1936年営口生まれ、営口市老辺区物質局から定年退職した。

私の三番目の兄貴が抗米援朝に行った。彼は満洲国の「国兵漏」で、国民党が来たら、兵隊を徴発された。長春が解放された際に、そのまま八路軍へ編入された。瀋陽の戦いなどにも参加して、東北解放後、関内へ行った。そして、天津、北京、ずっと広州、海南まで戦いに行った。でも、海南の戦争はまだ始まっていない時、朝鮮戦争へ出発したみたいだった。でも、その時彼はどこへ行くのか分からなくて、秘密に行った。彼は食事場で働いた。上甘嶺戦役で6人が生き残った。彼はその内の一人だった。(抗米援朝参軍)行きたい人いたが、行きたくない人も少なくなかった。抗米援朝以降、私と同じ職場で働いた劉S Cという人が

34 2014年2月に実施した聞き取り調査である。

いた。彼は1950年ころ銀行の職員で、予備党員だった。彼を朝鮮戦争へ派遣しようとしたが、彼は行きたくなかった。そして、予備党員の資格を取り消されて、その後も党に入ることができなかった。また、幹部になることもできないし、文化大革命前後かな、農村へ下放された。1950年代の工作隊組は、時期ごとの中心的任務が異なって、我々のところで、殆どは担架隊、馬車隊など抗米援朝を支援するように動員した。

これらの口述資料により、東北において志願軍になった人に関しては、満洲国の「国兵漏」³⁵→国民党軍→八路军・解放軍→志願軍、という経緯が確認できる。これらの人々は満洲国時代に、労働力として徴収されて、国民党が来たら国民党軍になり、その後中共政権に再び徴兵された。そして、閩内の国共内戦の戦場に送り込まれ、知らないうちに志願軍になって、朝鮮戦争に送り出された。しかし、その経緯の中で本人の積極的な参軍意識がほとんど見られなかった³⁶。特に「国民党の時に兵隊だったのに、我々が来たら兵隊に入らないの」と聞かれたら、本人にとって、参軍という選択肢しかなかったように感じられる。また、まれに都市の参軍の事例も語られた。都市の銀行職員は中共の積極分子であって、中共の参軍動員に応えなかったら、その後の政治生活だけではなく、職場での出世も困難になった。また、政治運動があるたびに、いち早く闘争の矢先になった。しかし、それでもその銀行職員は参軍の要求を断ったことが見て取れる。

そして、もう一つの志願軍の供給源として、元志願軍の呉HFの語りから窺える。呉HFは1925年営口市生まれ、1950年朝鮮戦争を参加して、1953年中国に帰った。

解放前、鞍山で民兵に参加して、2年後部隊に入った。第四野戦軍であった。解放戦争のときの兵士の供給源は農民であった。土地改革を経て、80%以上の兵士は農民で、わずか一部分は労働者であった。参軍後、政治教育を行った。教育の方式は訴苦であった。大部分は貧下中農で、過去親戚が国民党に殺されたことなど経験した苦しみを語った。私も参加したことがある。私も2畝の土地をもらったので、いくつかを話した。特に、日本が東北を統治した時、家族成員が死んだことであった。訴苦が終わったら、見送りした。つまり、馬車とかの紙人形を作って、燃やすことであった。本当のことと同じように、昔殺害された親族のために、葬式、見送り、哀悼をささげた。兵士たちが隊を組んで行った。そして、みんなは積極的になった。私は1950年中国のはじめての空軍訓練を受けて、1950年朝鮮戦争を参加した。当時、参軍に関して、個別の誤った現象があった。例えば、人を集めて大会を開き、オンドルを熱く炊き続け、暑さに耐えなければ、参軍させられた³⁷。

35 満洲国時期、身体検査に合格した適齢の青年男子は満洲国国軍になるが、合格できない人々は「国兵漏」と呼ばれた。

36 瀋幸儀の研究では、朝鮮戦争後、台湾に送還された捕虜の記憶によれば、中共と国民党の両党に対して、ともに好感を持っておらず、日中戦争、国共内戦、朝鮮戦争の参加はいずれも志願したわけではなかったと指摘している（瀋2013：第4章）。

37 2014年2月に実施した聞き取り調査である。

上記の口述資料の話者呉HFの事例は前に検討した国共内戦期の地方武装組織から主力部隊へ兵力を供出した事例である。呉HFは民兵から第四野戦軍になって、国共内戦に参加して、さらに抗米援朝の志願軍になったのである。その中で、中共の最も重要なイデオロギー操作の手段である「訴苦」が語られている。「訴苦」は土地改革、参軍運動や反革命鎮圧など、日中戦争期から、人民共和国建国後まで、長く存在していたと知られている。まず、工作人員は「訴苦」用の素材を収集して、その素材をもって、被害を受けた民衆の意見を広く集めた。そして、比較的積極的に被害者を通じて、多くの原告者と繋がりを持ってから、「訴苦」大会に至ったのである³⁸。中共はこうした「訴苦」を経て、編集された物語を通じて、中共のイデオロギーを民衆に共有させようとした。呉HFが語った「訴苦」は従来の「訴苦」と異なり、土地改革や参軍運動の過程における「訴苦」ではなく、次の段階の軍隊に入ってから、集団的な「訴苦」であった。その中で、土地革命や反革命鎮圧といった運動において、一貫として「封建的」な残りかすと位置付けられた民間信仰（「迷信」）は、中共によって引き起こされて、イデオロギーを浸透させるために役立つ装置として、積極的な役割を果たしたことが窺える。

中共革命と民間信仰との関係について、丸田孝志が中共による作り出された神は伝統的民間信仰の神をすり替えて、民衆の間で普及し、中共のイデオロギーを浸透させようとしたと指摘している³⁹。これに対して、中共革命と民間信仰との関係、あるいは中共による民間信仰の利用について、上記の口述資料を通じて新たな視点が提供できる。つまり、民衆の伝統的民間信仰をすり替えるのではなく、亡くした親戚を追悼する伝統的儀礼をそのまま利用することによって、満洲国支配者や国民党に対する恨みを共有させ、兵士の連帯感を作ろうとしたのである。

IV. おわりに

本稿では中国の東北を事例として、国共内戦期と朝鮮戦争期における参軍運動と軍の構成を検討してきた。国共内戦期において、中共軍の勢力の拡大は主に戦局に左右されていた。新兵の構成から見れば、新たに現地の民衆から徴兵することは困難であり、限界があったのに対して、1947年以降、大量の国民党軍兵士を改編することによって、兵力を急速に拡大させた。1950年に勃発した朝鮮戦争に際して、これらの兵士はまた志願軍の主力となり、西南地域の「土匪」と閩内地域からの徴兵とともに朝鮮へ送り出された。抗米援朝運動において、東北は後方支援の位置づけであったために、特に都市においては大規模な徴兵は行われていなかった。国共内戦期における民衆は自己の打算に基づいて政治選択を行う傾向が強かった。朝鮮戦争期では、政党の選択肢もなくなったため、民衆は政権に対して消極的な服従と消極的な抵抗を行ったのである。

まず、国共内戦における中共軍の拡大について、1945年末まで、中共は優勢に立ち、根拠地

38 『城市群衆工作研究』張烈ほか編、東北書店牡丹江分店、1948年、10-11頁。

39 例えば、丸田孝志による研究が日中戦争末期から内戦期にかけて、毛沢東像を伝統的の神像の代わりに普遍的に村の儀礼や通過儀礼などで使用し、民衆の家庭までに浸透させたと指摘している（丸田 2013 : 177-184）。

建設を企図せず、投降した旧満洲国国軍を利用して軍事力拡張を果たした。1945年末、国民党軍が東北へ到着したため、中共の優勢が失われ、一度改編した勢力の反逆による被害が深刻であった。中共は大都市から周辺地域へ後退して、根拠地建設を始めたが、劣勢であったため民衆の協力を得られず、軍事力の継続的な拡大が困難であった。ところが、1947年夏以降、国民党の失敗に基づいて勢いを盛り返した中共は、国民党軍捕虜を編入して急速に軍事力拡張を遂げた。このように中共は軍事的ヘゲモニーによって、東北での勝利を収め、全国での勝利に繋がった。こうした過程において、大多数の民衆は依然として保身のために傍観的姿勢を取ったり、戦局にそって中共に従ったり、反逆したりした対応を示した。中共は党と民衆の間に緊密な関係を形成することができなかつたと指摘できる。

そして、抗米援朝運動において、東北は重要な後方支援の役を演じていたことを明らかにした。全国の志願軍の調達環境の中で、東北、とくに都市においては、中共は民衆の参軍の情熱を宣伝する一方で、大規模な参軍運動を行っていなかった。新たに農村から強制的な手段によって徴兵された農民があったが、志願軍の主要な供給源ではなかった。やはり、国共内戦期、大量に改編された国民党兵士はそのまま関内の内戦へ、さらに、主力として朝鮮戦争へ投入された。また、抗米援朝運動と同時期の西南地域の国共内戦や「剿匪」は、志願軍に新たな兵力の供給源を提供した。従って、朝鮮戦争で、志願軍の減員が大きな問題となったが、国共内戦期と類似して、中共にとって、兵力の供給はそれほど大きな問題にならなかったようである（ただし、朝鮮戦場の立場から見れば、戦闘力を備える兵力は別の話である）。それに加えて、抗米援朝運動において、東北は大後方であり、特に都市部は朝鮮戦争の物資、担架隊等の補給や、軍隊の訓練のために重要な意味を持っていた。こうした東北の生産力を維持する必要もあり、本来から重い徴兵任務を与えられなかった。一方で、実際に民衆は宣伝されていたような積極性がなかった。中共は自ら自分のイデオロギーに反するもの（民間信仰）を引き起こして、民衆（兵士）の帰属感と団結力を作り出すようにした。ところが、民衆側は単なる服従ではなく、「参軍とオンドル」のような中共による強制徴兵の話を広めていた現象が、多くの民衆の自ら参軍したくないという意志の現れであり、中共のイデオロギーに抵抗する表象であった。

参考文献

- 角崎信也 2010「新兵動員と土地改革—国共内戦期東北区を事例として—」『近きに在りて』57号, 6月, 55-67頁。
- 河野正 2016「朝鮮戦争時期、基層社会における戦時動員—河北省を中心に」『中国研究月報』70巻4号, 4月, 1-12頁。
- 解学詩 2002「満洲国末期の強制労働」松村高夫・解学詩・江田憲治(編)『満鉄労働史の研究』日本経済評論社, 71-121頁。
- 隋藝 2015「中華人民共和国建国前後の共産党の都市大衆工作与基層社会の再編—遼寧省を中心に—」

- 『中国研究月報』69卷11号, 11月, 1-21頁。
- 松本俊郎 1998『侵略と開発—日本資本主義と中国植民地化—』御茶の水書房。
- 丸田孝志 2013『革命の儀礼』汲古書院。
- 門間理良 1997「国共内戦期の東北における中共の新兵動員工作」『史境』35号, 9月, 20-39頁。
- 周傑榮 2011「從反共到抗美—1950-1951年中国西南地区的内戦与朝鮮戦争—」周傑榮・畢克偉『勝利的困境—中華人民共和國的最初歲月』姚昱他訳, 香港中文大学出版社, 109-135頁。
- 麥克法夸爾R・費正清編 1990『劍橋中華人民共和國史—革命的中国的興起1949-1965年—』中国社会科学出版社, 謝亮生他訳。
- 張克良 1984「九万鋼鉄、礦山工人的苦難」解学詩・張克良編『鞍鋼史(1909~1948年)』冶金工業出版社, 337-384頁。
- 丁曉春・戈福録・王世英編 1987『東北解放戦争大事記』中共党史資料出版社。
- 戴常榮・劉聯華主編 1996『第四野戦軍』国防大学出版社。
- 瀋幸儀 2013『一万四千個証人—韓戦時期「反共義士」之研究—』国史館。
- Dikötter, Frank 2013 *The Tragedy of Liberation : A History of the Chinese Revolution 1945-1957*. New York, Bloomsbury Press.